

〈目次〉

博士論文の要約 1

1、富田幸次郎の生涯：フェノロサ・岡倉研究の先へ . . . 1

2、富田幸次郎に関する先行研究 5

3、本論文が依拠する資料 6

4、各章の要約 8

1、富田幸次郎の生涯：フェノロサ・岡倉研究の先へ

富田幸次郎（1890～1976）は東洋美術コレクションで名高い、米国ボストン美術館のアジア部長を戦前、戦中、戦後の32年間（1931～1963）という長きにわたって勤めた人物である。彼は岡倉覚三最後の弟子と伝えられつつも、岡倉周辺の人物としてただ一人その境遇や業績がこれまでわかっていなかった人物である。

本論文の目的は、この富田幸次郎という人物は、一体どのような生い立ちをもっていたのか、どういういきさつでアメリカに来ることになったのか、彼はアメリカでどのような人物たちに出会い、またどのような活動をしたのか、これらのことを探りながらその人物像を明らかにすることにある。またそれのみに止まらず、彼の生涯に迫ることにより、20世紀前半の日米間の緊張を背景に、日米の文化領域における彼の働きはどのようなものであったか、そして彼の関わった日米交流がどのように行われたかを検討する。

初めに富田幸次郎の生涯を簡潔に見ておく。彼は1890年（明治23年）、高名な蒔絵師であった富田幸七（1854～1910）の長男として京都に生まれた。京都市立美術工芸学校卒業後、16歳で農商務省海外実業練習生としてボストンに赴任中、岡倉覚三（天心 1863～1913）の知遇を得、請われてボストン美術館中国・日本部のアシスタントとして働くこととなった。1908年頃のことである。彼は1921年、同職場で出会ったポストニアン人のハリエット・ディッキンソン（Harriet Dickinson, 1889～1985）と結婚した。アジア部次長を経て1931年41歳でアジア部長に就任後、太平洋戦争が始まってからもその職にとどまった。1953年米国籍を取得し、1963年に退職すると名誉部長の称号を贈られた。そして1976年（昭和51年）

86歳でその生涯を合衆国で閉じた。

1933年（昭和8年）、日本では「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」が成立した。これは富田が超国宝級の絵巻『吉備大臣入唐絵詞』をボストン美術館を代表して購入したことが発端である。彼は当時、「国賊」と呼ばれるほどの激しい非難を祖国から受けた。そのため彼の業績はこれまで正当な評価を受けていないのが実情である。

富田の前任者たちである、同様なポジションに在ったアーネスト・フェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa, 1853～1908 日本部長）、岡倉覚三（中国・日本部長）については、後述するように、これまで様々な研究が発表されてきた。しかしながら、ボストン美術館における在任期間は、フェノロサは1890年から1896年までの6年足らずである。一方岡倉の場合は、1904年から1913年までの9年間ボストン美術館と関係を持ったが、実はボストン滞在期間は合計しても2年に満たない。富田がアジア部の名声を保持しつつ55年（アジア部長としては32年間）勤務したという事実は、フェノロサや岡倉に比べ、美術館へ貢献した期間がはるかに長期に及んだことを示している。富田部長時代をボストン美術館では「アジア部の第二ゴールデン・エイジ」としている¹。

富田の先輩の一人であるフェノロサは、明治初期お雇い外国人としてアメリカから来日した美術史家であり哲学者であった。彼は『東亜美術史綱』（1912）などを著し、日本美術を評価し欧米に紹介した²。日本での仕事を離れたその後のフェノロサは、欧米の多彩な芸術家たちと交流を持ったことが知られている³。

フェノロサの生涯に注目し、ローレンス・W・チゾム（Lawrence W. Chisolm）は『フェノロサー極東とアメリカ文化』（1963）を著している⁴。チゾムのこの著作は、フェノロサがアーサー・ダウ（Arthur Dow, 1857～1922）や、ジョージア・オキーフ（Georgia O'Keeffe, 1887～1986）、エズラ・パウンド（Ezra Pound, 1885～1972）等、アメリカのモダニズムの画家や詩人たちに影響力があったことを指摘している。これに関連し、山口静一は彼の日本やアメリカでの影響や業績を振り返り、『フェノロサー日本文化の宣揚に捧げた一生』（上下、1982）を著している⁵。山口は、「…（お雇い外国人の中で）全生涯を日本文化の宣揚に捧げ、これを以て自国の文化を変革しようとするほどの熱意を持った人間と言え、フェノロサを描いて考えられないであろう…」と高く評価している⁶。さらに、村形明子は『アーネスト・F・フェノロサ文書集成—翻刻・翻訳と研究』（上下、2000～2001）を著している⁷。村形は本著作において従来日本のフェノロサ研究で遅れていた部分、ボストン時代のフェノロサの講演内容を紹介している。

このように、チゾムや山口、村形他による緻密な資料調査に基づく研究により、フェノロサが行った日本やアメリカでの美術や文学あるいは演劇といった分野における活動の内容が今日明らかにされている。また近年では、宗像衣子が『響き合う東西文化—マラルメの光芒、フェノロサの反影』(2015)を著し、文学者としてのフェノロサの一面を重要視している⁸。いずれにしてもこれらの諸研究により、フェノロサが日本美術の研究に引き付けられ、この分野で名を成した最初の外国人であったことが確認できる。

一方、キュレーターとして富田の直接的な先輩に当たる、岡倉覚三に関しては、フェノロサ以上に研究が進んだ状況であるといえるかもしれない。東京大学でフェノロサの弟子となった岡倉はその感化を受け、早くから伝統的な日本美術の精神性の高さを見抜いていた。やがて文部官僚を経て数え年 29 歳で東京美術学校校長となった岡倉は、近代日本における美術史学の開拓者となり、その生涯を美術の世界で生きることになった。

傍ら、岡倉覚三は欧米諸国民に東洋の伝統的精神の意義を知らせようと、自身の英文著作として『東洋の理想』(1903)、『日本の覚醒』(1904)、『茶の本』(1906)を世に発表した⁹。これら英文三部作のうち、ボストン美術館での講演が基になった『茶の本』は、出版から 110 年以上を経た今日、数カ国語にも翻訳され世界各国で読み継がれている。一輪の野の花の風情と一碗の茶、茶室での瞑想を愛した岡倉が、晩年に到達した境地を、時にユーモアを混じえつつ東西の文明批評を盛り込んでさりげなく語っている。人々は、岡倉の軽やかな筆致で描かれる物質文明への批判に普遍的な共感を寄せるのであろう。

岡倉作品として上記英文著作を含みながら、現存する岡倉の全著作(他に、詩歌、論文、調査記録、講義録、日記、書簡など)、及び関係資料のほとんどを収録した『岡倉天心全集』(1981)という決定版が今日存在している¹⁰。過去に多くの研究者が岡倉の伝記・研究書に挑戦しており、その数は膨大である。親族による回想や評伝も多い¹¹。

岡倉のボストン時代に関してならば、堀岡弥寿子が『岡倉天心—アジア文化宣揚の先駆者』(1974)、『岡倉天心考』(1982)を著し、岡倉の日本・インド・米国における活動や交友関係を紹介している¹²。さらに、岡倉の晩年のボストン時代を一要素として、彼の全生涯の多様性に言及したものとしては、大岡信(1931~2017)が『岡倉天心』(1975)を著している¹³。また、大久保喬樹は『岡倉天心—驚異的な光に満ちた空虚』(1987)を著し¹⁴、ボストン時代の岡倉の内面に大岡と同様関心を寄せている。大久保はボストン時代の岡倉の英文作品である、『茶の本』、オペラ『白狐』の台本¹⁵、「バネルジー夫人宛て書簡」¹⁶の三作品(書簡を含む)を、天心のあらゆる文章中でも最高の名文であると評している¹⁷。

近年では、清水恵美子が『岡倉天心の比較文化史的研究ーボストンでの活動と芸術思想』（2012）を著し、岡倉が行ったボストン美術館行政を通じ、彼のボストン時代の活動の詳細を分析している¹⁸。清水は、フェノロサ以来の「日本部」を、岡倉が「中国・日本部」に拡大しそれをもって世界に向け、東洋美術の発信拠点として発展することを願ったと述べている。また、岡倉が予算獲得、良質なコレクションの収集、教育プログラムを通して参観者の東洋美術への理解を促進させる、あるいは人材の育成など、多様な事業を展開させたことを明らかにしている。

実は、このように今日日本で岡倉のボストンでの業績が知られるようになったのは、富田幸次郎が日本にもたらした資料に負うところが少なくないのである。その意味で富田幸次郎について知見を深めることは、岡倉天心研究にも資すると思われる。

ボストン美術館が東洋美術コレクションで名高く、そこでフェノロサや岡倉覚三が貢献したことについてはよく知られている。しかしそこで途切れてしまっているかのように思われる。戦前・戦中・戦後という日米関係が最も緊張した長い時期に、彼等よりずっと長くアジア部長（岡倉以後「中国・日本部」はさらに拡大し「アジア部」となる）に就任し、冒頭述べたように、アメリカ合衆国の人々にアジアの美術を紹介し続けた、富田幸次郎について知る人は多くない。その生涯は謎に包まれていると言って過言ではない。

著名なアメリカ・東アジア外交史家のウォレン・コーエン（Warren I. Cohen）は、『アメリカが見た東アジア美術』（1999）を著し、「東アジア美術は、現代のアメリカ文化の重要な要素の一つであり、アジアの文化がアメリカの生活に溶け込んだよい例であると思う」と述べている¹⁹。コーエンはこの著作において、18世紀から20世紀にかけての、中国と日本の美術がアメリカ文化に入った過程、蒐集、展示の歴史を述べ、さらに、それらのことについての本を著したり、講義をした人々の物語を紹介している。フェノロサや、岡倉、富田も、先駆者たちとして本著作に登場する。しかしながら富田に関する記載は断片的である。

本論文は富田の誕生から死まで、20世紀の日米関係を背景にするその人生を、トータルな形で描き出す試みである。この作業を通じ、ボストン美術館を舞台に、明治以来の日米文化交流と、戦後の両国の和解に至る経緯を明らかにしたいと思う。そして富田幸次郎が美術を通して日本とアメリカ合衆国の絆を深め、合衆国で最も成功した日系アメリカ人の第一世代の一人として認識されることを期待する。

さらに本論文は、富田幸次郎を、ボストン美術館の東洋美術キュレーターたちであったフェノロサ、岡倉以来の系譜に位置付け、同時に日露戦争以後次第に緊張度を増す日米関係を

背景に、富田の生涯がどのようにその歴史に呼応していったかを明らかにしようと思う。より正確な富田幸次郎に関する情報を提供するため、筆者は日米において調査を行い、それまでの断片的な資料からなる知見の欠落を補うことにした。

アジア部長であった富田が、日本美術としてボストン美術館のために購入した作品は、先に言及した『吉備大臣入唐絵詞』以外にさほど多くはない。実は、希代の目利きとしての富田の名声は、閻立本『帝王図鑑』や、徽宗『五色鸚鵡図』などの、中国絵画の名品をアメリカにもたらしたこと、つまり中国美術研究の功績が大きいことに拠っている。彼がアジア部長に就任したのは1931年のことで、まさに満州事変が勃発した年である。彼の部長時代はこの日中戦争を背景にしているのである。そのような時代に冷静さを失わず、日本人であっても中国美術にも尊敬を抱きつつ、米国の人々に中国、日本を含むアジアの美術を紹介し続けた富田という人物は注目に値しよう。

さらに、富田のアジア部長時代は日米戦争をも背景としている。ボストン美術館はこの間、敵性外国人となった富田を当局の催促にもかかわらず日本へ強制送還させていない。このような事実は1941年の真珠湾攻撃以降に行われた、日本人強制収容が代表するアメリカ人の激しい日本人への偏見とは別の、アメリカ合衆国の側面を明らかにするものであろう。アメリカ東部のボストン美術館という一つの空間、一つのコミュニティが日本人排斥一色に染まっていないことを示している。歴史の多様性を示す好例であろう。

富田幸次郎は、20世紀前半の日露戦争を境により困難になった日米関係を背景に、美術を通して日本や東アジアとアメリカをつなぐ仕事をした。その仕事がどのようなもので、どのような困難に直面したかについての研究はいまだ少ない。その意味で本論文は新しい知見を日米文化交渉史に与えうると考えている。

2、富田幸次郎に関する先行研究

富田幸次郎の誕生から死までを実証した先行研究は、管見の限りでは見当たらないとは言え、先に言及したコーエンの『アメリカが見た東アジア美術』以外の文献にも、ボストン美術館に勤める富田がアメリカの人々にアジアの美術を紹介しつづけた人物として登場する。

例えば、ウィリアム・スラッシャー (William Thrasher) が、『富田幸次郎に捧ぐ』を著し富田の生涯の概略を伝えている²⁰。さらに、堀田謹吾は『名品流転—ボストン美術館の「日

本』(2001)における第7章、「富田王朝」で、富田のアジア部長時代の出来事を特に取り上げている²¹。しかしながら、共に富田の生涯について詳しいとは言い難く、間違いが散見される。また、富田に関する論文としてはコンスタンス・チェンが、「トランスナショナルな東洋人」という題目で、20世紀前半のアメリカ東部におけるアジア人知識人として、岡倉、富田の活動を紹介している²²。このように少ないながら評伝が全く存在しないわけではない。しかし、富田に関する情報はこれらの文献によってもわずかである。

いずれにしても、これまで富田幸次郎の研究はあまりされなかった。理由はいくつか考えられる。第1には、富田は少年期をのぞいて70年という歳月を米国で過ごし、アメリカ人女性を妻にし、戦後米国籍を得た。そして長い間、大方の日本人はもとより親族からも米国人と思われており忘れ去られており、そのため資料発掘が十分に行われなかったことが考えられる。第2にはすでに述べたように、美術品国外流出問題が語られる時、常に『吉備大臣入唐絵詞』を富田がボストン美術館に購入したことが俎上にあがるという、つまり日本にとって彼にはずっと負のイメージが付きまとっていたことが考えられる。さらに、第3の理由として、米国側では、彼が現実には63歳まで日本国籍であったので同胞としての関心を抱きにくかったこと、また、彼が遺した多くの日本語資料を判読するには、不自由さがあったであろうことも理由となる。

日米両国で、富田幸次郎最晩年を知る人々はすでに高齢となっている。その人々に聞き取りを実施し提供された貴重な資料を纏めるという機会を、筆者は最後にとらえることが出来たと考えている。

3、本論文が依拠する資料

本研究の遂行過程で筆者は、富田幸次郎に関する新資料を発掘した。その主なものは、米国マサチューセッツ州ダックスベリーに所在する、アート・コンプレックス・ミュージアム(The Art Complex Museum, 189 Alden Street, Duxbury 以下、ACMとする)が所蔵する資料群である。これは「富田幸次郎資料」(The Kojiro Tomita Archives)と名付けられている。本資料は富田幸次郎夫人ハリエット・ディッキンソン・富田が遺したもので、未整理な状況に置かれたまま、これまでほとんど公開されなかったものである。

そのいきさつについて少し述べておく。富田の人生には分からない部分が多岐に多く、筆者は修士論文「富田幸次郎の生涯」を提出した後も調査を続ける必要を感じていた。上に

述べたように、筆者はハリエット夫人が遺言で ACM に富田夫妻の遺品の総てを遺したことを知っていた。そして、修士論文執筆時プリマスからほど近い海辺の ACM を訪ね、その日本庭園に存在する「松風庵」という茶室で行われた茶道裏千家ボストン支部による「富田幸次郎に捧げられる茶会」に出席した。その折、館長チャールズ・ウェヤハウザー (Charles Weyerhaeuser) 氏に資料公開をお願いした。しかし、その返答は「まだコンフィデンシャルである」だった。

ウェヤハウザー氏とは、近況報告や筆者の論文が掲載された学会誌を送るなどして細々と交流はつづいていた。2017年の春、ウェヤハウザー氏から「資料を見せたいが、いつアメリカに来るのか」という手紙を突然受け取ったのである。そのような経緯を経て、その年の夏、ACM において「富田幸次郎資料」の調査を行うことになったのである。

この「富田幸次郎資料」の中には、富田が書いた農商務省海外実業練習生時代の家族宛の書簡や、エドワード・モース (Edward Sylvester Morse, 1838~1925) が、富田の目の前で書いて見せた鉛筆画での走り書きのスケッチも存在していた。さらに、彼自身や彼の周辺の人物たちからの書簡や写真等も含まれていた。また、数々の書類は富田にとって太平洋戦争中の出来事を明かすものであった。彼自身が書いた手稿や、ハリエット夫人が夫との思い出を語った手稿などもあった。ACM が独自に集めた富田夫妻に関する資料もあった。富田夫妻の肖像画や、幸次郎の父富田幸七による蒔絵作品、及び富田が終生所蔵した富岡鉄斎 (1837~1924) の作品や、岡倉から譲られた濃茶道具など、筆者には初めて見るものばかりであった。また、水晶や翡翠等の材質に彫られた東洋的な図柄の、根付にも似たいくつもの印章が一つの箱に収められ、富田が愛用した文房具として筆者の記憶に残った。

ACM 以外の資料としては以下を挙げておく。第1は、ボストン美術館図書館 (The William Morris Hunt Memorial Library) がまとめて所蔵する『ボストン美術館紀要』²³、『ボストン美術館年報』²⁴及び書籍となっている富田幸次郎の著作である。第2に、イザベラ・ガードナー美術館が所蔵する富田とガードナー夫人 (Isabella Stewart Gardner, 1840~1924) の間に交わされた書簡及び富田が夫人に贈ったパゴダ等がある。ガードナー夫人と富田との細やかな交流はこれまで知られていないものである。

また筆者は日本国内においても新資料の収集に努め、富田家親族や富田のアジア部での後輩にあたる人々にインタビューを試みた。彼等から聞き得た肉声の情報は、文献資料に無い厚みを本論文に加えたように思う。親族からは父幸七による自筆履歴書や、幸次郎の戸籍などの提供を受け、これらの資料により、富田父子の人物像の輪郭を明確にすることが出来

たように思う。国立国会図書館が所蔵する「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」をめぐる国会議事速記録等の、日本国内における一次資料や関連資料も筆者は参照した。

4、各章の要約

本論文は次の様な構成をとっている。

第1章「蒔絵師富田幸七―漆の近代を見つめて―」では、富田幸次郎の生育環境がどのようなものであったかを考えるために、幸次郎の父富田幸七（1854～1910）の生涯を描くことを試みる。伝統と近代化の間に生きた富田幸七の蒔絵師としての苦闘を描く。

第2章「生い立ちと留学（1890～1907）」では、富田幸次郎の少年時代から留学までの軌跡を明らかにする。富田幸次郎が21歳で記した自筆履歴書に沿って述べる。初めに戸籍や生育環境を紹介した上で、1906年農商務省海外実業練習生に選ばれ、塗料（西洋式の油を使用した）調査及び漆器の販路拡大を目的としてボストンに赴任し、ボストン美術館で岡倉覚三に出会う17歳頃までを射程におく。

第3章「ボストン美術館―めぐり合う人々―（1908～1915）」では、富田幸次郎が農商務省海外実業練習生として、あるいはボストン美術館で働く中、どのような人物と出会ったかを明らかにする。エドワード・モース、ウィリアム・ビゲロー（William Bigelow, 1850～1926）、エドワード・ホームズ（Edward Holmes, 1873～1950）、イザベラ・ガードナー、富田にとって師父と仰ぐ唯一の存在であった岡倉覚三、生涯の伴侶となるハリエット・ディッキンソンたちを登場させる。本章は彼の青年時代の記録であり、彼がボストンで所属したコミュニティの記録でもある。

第4章「司馬江漢の落款をめぐる論争考―アーサー・ウェイリー、富田幸次郎による―（1916～1930）」では、富田幸次郎が大英博物館所員で『源氏物語』の英訳で知られるアーサー・ウェイリー（Arthur David Waley, 1889～1966）と、1929年に司馬江漢（1747～1818）の浮世絵師時代の落款（署名・印章）をめぐる、論争を行ったことの意味について考察する。この事件をきっかけに、富田は東洋美術及び言語に通じていると評価され、その後のボストン美術館アジア部長の地位を確定したと考えられることを明らかにする。

第5章「国賊と呼ばれて―『吉備大臣入唐絵詞』の購入―（1931～1935）」では、富田が1931年ボストン美術館アジア部長に就任した後、日本で「国賊」と呼ばれたその事件について検討を加える。また、彼のアジア部長時代がどのようなものであったか、つまり日中戦

争、日米戦争を挟んだその時代は、アーネスト・フェノロサ、岡倉覚三、ジョン・ロッジ (John Ellerton Lodge 1876～1942) 等、富田以前のキュレーターたちに比べ、どのような特色をもっていたかを探っていく。

第6章「1936年『ボストン日本古美術展覧会』の試み—戦間期における日米文化交流の1事例として— (1936～1940)」では、次のようなことを述べる。日本ではまったく無名であった富田幸次郎の名前は、「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」(1933年)成立の後、にわかに知られるようになる。その彼に、戦前、国際文化振興會という日本政府の外郭団体が協力を要請する。富田はそれに応え日米友好の文化事業である「ボストン日本古美術展」開催に力を尽くした。本章は、日米文化交流の上で富田が重要な役割を果たす、この1936年開催の「ボストン日本古美術展」とはどのようなものであったか、その詳細を明らかにするとともに、その国際関係上の意味を検討する。

終章「太平洋戦争、その後 (1941～1976)」では、富田幸次郎が敵性外国人という困難な状況下、ラングドン・ウォーナー (Langdon Warner, 1881～1955) と共に、ロバーツ委員会のメンバーとして、日本の文化財への空爆阻止のために奮闘したことを述べる。また、彼の中国古代美術への造詣の深さについても触れる。加えて、戦後の富田の活動を紹介するとともに、彼が生涯にわたって行った仕事の意義についてまとめる。

なお参考資料として、付録1「富田幸次郎著作目録」、付録2「富田幸次郎略年譜」、付録3「富田幸七略年譜」を作成し巻末に添付する。本論文では「アジア部長」を、正式な呼称である「アジア部キュレーター」と同意義に使用する。富田自身が「私が部長になってから…」などと和文で記しているからである²⁵。

-
- ¹ Walter M. Whitehill, *Museum of Fine Arts Boston: A Centennial History*, Vol. 2 (Cambridge: Harvard University Press, 1970), 526.
- ² Ernest Fenollosa, *Epochs of Chinese and Japanese Art* (London: William Heineman, 1912). 日本での初訳は(有賀長雄)『東亜美術史綱』(1921年)。アーネスト・フェノロサ(森東吾他訳)『東洋美術史綱』上下(東京美術、1978~1981年)を参照。
- ³ Lawrence W. Chisolm, *Fenollosa: The Far East and American Culture* (New Haven: Yale University Press, 1963).
- ⁴ Ibid.
- ⁵ 山口静一『フェノロサー日本文化の宣揚に捧げた一生』上下(三省堂、1982年)。
- ⁶ 山口、8頁。
- ⁷ 村形明子『アーネスト・F・フェノロサ文書集成—翻刻・翻訳と研究』上下(京都大学出版会、2000~2001年)。
- ⁸ 宗像衣子『響き合う東西文化—マラルメの光芒、フェノロサの反影』(思文閣出版、2015年)。
- ⁹ Sunao Nakamura, ed., *Okakura Kakuzo Collected English Writings* Vol. 1~3 (Tokyo: Heibonsya Limited, 1984). 『東洋の理想』(*The Ideals of The East with Special reference to The Art of Japan*, 1903); 『日本の覚醒』(*The Awakening of Japan*, 1904); 『茶の本』(*The Book of Tea*, 1906).
- ¹⁰ 岡倉天心『岡倉天心全集』全9巻(平凡社、1981年)。
- ¹¹ 岡倉一雄『父岡倉天心』(中央公論社、1971年)、他。
- ¹² 堀岡弥寿子『岡倉天心—アジア文化宣揚の先駆者』(吉川弘文館、1974年)。堀岡弥寿子『岡倉天心考』(吉川弘文館、1982年)。
- ¹³ 大岡信『岡倉天心』(朝日新聞社、1975年)。
- ¹⁴ 大久保喬樹『岡倉天心—驚異的な光に満ちた空虚』(小沢書店、1987年)。
- ¹⁵ *The White Fox: A Fairy Drama in Three Acts Written for Music* (邦題は『白狐』)。信太の森の女狐が阿部保名と結婚し清明を産むが、正体を見破られて姿を消したという信太妻伝説が下敷きとなっている。岡倉生前には活字化されず、ハリエット・ディッキンソンのタイプ稿が定稿となっている。
- ¹⁶ 詩聖タゴールを大伯父にもつ閨秀詩人、プリャンバダ・デーヴィ・バネルジー夫人に宛てた岡倉最晩年の書簡群。
- ¹⁷ 岡倉天心(大久保喬樹訳)『新訳茶の本』(角川文庫、2005年)、137頁。
- ¹⁸ 清水恵美子『岡倉天心の比較文化史的研究—ボストンでの活動と芸術思想』(思文閣出版、2012年)。
- ¹⁹ ウォレン・コーエン(川蔦一穂訳)『アメリカが見た東アジア美術』(スカイドア、1999年)。コーエンには他に(小谷まさ代訳)『アメリカがアジアになる日』(草思社、2002)などの著作がある。
- ²⁰ William Thrasher, *Tribute to Kojiro Tomita* (Duxbury, Massachusetts: Art Complex Museum, 1990).
- ²¹ 堀田謹吾『名品流転—ボストン美術館の「日本」』(日本放送協会、2001年)、260~294頁。
- ²² Constance J. S. Chen, “Transnational Orientals: Scholars of Art, Nationalist Discourses, and the Question of Intellectual Authority,” *Journal of Asian American Studies*, Vol. 9, No. 3 (October 2006), 215~242.
- ²³ Museum of Fine Arts, Boston, *Museum of Fine Arts Bulletin* (Boston: Museum of Fine Arts, Boston, 1907~1963). 『ボストン美術館紀要』のこと。
- ²⁴ Museum of Fine Arts, Boston, *Annual Report* (Cambridge: The Metcalf Press, 1910~

1913), (Boston: T. O. Metcalf Company, 1914～1945), (Boston: Museum of Fine Arts, Boston, 1946～1963). 『ボストン美術館年報』のこと。

²⁵ 富田幸次郎「ボストン美術館 50 年」『芸術新潮』8月号 (1958年)、286頁。